

# 宮澤賢治『なめとこ山の熊』の「因果」考(一)

## ——「共苦と共生」の思想——

千葉 貢

### 目次

- 一、はじめに——「失調」の氾濫
- 二、「ためらい」という自制(以上までが本号)
- 三、「商売」という因果
- 四、因縁生起という「相関」の原理
- 五、「共死」という輪廻転生——まとめに代えて

### 一、はじめに——「失調」の氾濫

環境問題が取り沙汰され、「共生」「共存」「調和」「循環」「再生」などと叫ばれて久しい。「自然と人間の共生」「生活と環境の調和」、そして「環境にやさしい○○」「環境に配慮した△△」「循環型○○」「△△の再生」などという趣旨も同じくして、「自然」や「環境」との「共生」「共存」「調和」「循環」「再生」の大切さを強調している。訴えているのは人間であつて「自然」や「環境」ではない。これは人間自らの不

都合を証左するものである。「自然」や「環境」を共にしているのは、動物や植物も含まれているのだから人間の活動に伴う悪影響や被害が拡大し、動物や植物にとどまらず、遂に人間自らの生存を脅かすまでに深刻化し、「問題だ」という自業自得の共通認識に他ならない。人間は自らの活動によって、生存の条件であり基盤である、一つしかない地球の生態系という環境の破壊や異変を生み出しながら、今さらながらでも「共生」「共存」「調和」「循環」「再生」を叫ばざるを得ない自己矛盾の露呈に覚醒し、自らの傲慢さを省みるべきなのではなからうか。

自然は自ら然らしめる自浄力、治癒力、自制力をもちながら自明の如く淘汰される。自然は人間のための環境ではない。「環境」の代表的な例として水や大気があげられる。人間はあなたのために生まれて来たのではないように、水や大気も人間のためにあるのではない。けれども人間は生まれながらにして迷惑をかけながら支えられている。水は水素と酸素が二対一の割合で化合したものであり、人間を含む

動物や植物の体の七〇〜九〇%を占めており生存に欠かせない。大気は体積比で酸素二〇・九三、窒素七八・一〇、アルゴン〇・九三、二酸化炭素〇・〇三、水素〇・〇一のほかには水蒸気、ネオン、ヘリウム、クリプトン、キセノンなどを微量に含んでいる。全地表面積の約七二%が水で覆われている、などということは周知の通りである。い<sup>①</sup>ずれも科学的に究明されたという数値であり物質名である。その他の「環境」についても科(化)学的な進歩によって微に入り細に亘って究明されたり証明されたりして、何をどうすればどうなるか、などということはほとんど解明されている。「科(化)学」の進歩を促し、事の実態を分析したり究明したりすることが発展の礎であり、明治以来の「近代化」の具現に適った作為とばかりに施し追求してきたのだから、当然の過程であり必然の結果である。従って、水や大気に限らず、自然の生態系を解明し、環境の性質や機能を承知しながら水や大気を汚染する「ハイテク産業(バイオテクノロジー産業も含む)」と、それを浄化しようという「バイオテクノロジー産業(ハイテク産業も含む)」は矛盾しているのではなからうか。その矛盾の相剋や乖離の拡大を無視するかのよう、「進歩だ」「発展だ」「開発だ」などと、強迫観念に駆られながら覇(権)の競い合いに余念がない。それは、高い山の登頂に成功したあとの、「やっと征服した!」という感想を聞いた<sup>②</sup>たびに、「征服」もまた傲慢この上ない表現なのではないかと思う。確かに「近代化」に勤しむ「科(化)学」の「進歩・発展・開発」によって、これまでにない事物が出現し、「便利」な「もの」を見たり手にしたり、

不明不可解な「こと」が解明されたり承知できたりと、驚嘆する間もないほどの「スピード」で多種多様に及び、「豊かさ」を満喫しているかのように見える。だが、「進歩・発展・開発・便利・スピード化」などをもたらしてきた「科(化)学」の矛盾に苦悩し、苦痛を強いられ苦杯をなめずにいられないのはどうしたことであろうか。いずれの「矛盾」も「進歩・発展・開発」の成果に伴う副産物にして瑣末なこと、完全無欠への途上だと居直り、言い訳通りに解消するのである。だから「進歩・発展・開発」とは、「もつとよくなるだろう」「きつとよくなるはずだ」と期待を抱かせる甘言に他ならないのである。そこで私は「きつとよくなるのだろう」「よくしてくれるのだろう」と夢見ていた少年の日を思い出す。——時は昭和三〇年代にして岩手県は最南端の町、そこは米の単作穀倉地帯。政策の一環と思われる「構造改善事業」によって、それまでの雑木林を新たに「開田」し、下から水を汲み上げてまで増産に励んだ。また、平坦地だけではなく中山間地の田圃まで、一枚当たりの耕作面積を耕耘機が導入しやすいように拡大、大型化すべくそれまでの畦道や水路の役割を果たしていた畦や堀、小川、溜池(当地では「堤」と呼んでいる)までが「構造改善」を強いられた。文字通り所狭しと動き回るブルドーザーによって画的に移動、あるいは効率的、合理的な場所に新設されたり、中山間地の景観を形成していたモザイク状の田圃や棚田が、整地という名の<sup>③</sup>下で破壊されたりした。そして、その数年後には「減反」と称する、ま

たしても合理的で計画的だという政策に強いられ、条件の悪い耕作地から休耕、不耕地、休遊地となり、たちまち雑草の繁茂する無残な姿に「改革」された。耕地構造の改善や米の増産だけが目的だったためか、田圃や畦（水路）には蛙や泥鰌、田螺、めだか、げんごろう、あめんぼなどの小動物が棲まなくなった。即ち、田圃は合理的、機能的に「構造改善」されたのだと言わんばかりに、耕作するときだけの水田や水路になり、収穫を終えるほとんどが乾田、空堀と化してしまふ。

農政も「近代化」を謳い、「ハイテク産業」の進展に促されての機械の導入、科(化)学の威信や効力を見せつけられるかのように農薬(特に除草、病気、害虫の駆除や稲の生育を助長するため)の普及と散布に努めてきた。各種の農作業に楽なものはないが、夏場の田の草取りほど難儀なものはない。そこで作業や労力の軽減、削除という「合理化」を図るために機械と農薬(除草剤など)の購入に迎合したのも無理からぬのであった。機械と農薬に依存した結果、確かに作業の簡略、簡素化や労力の軽減、省力化は実現し、「三ちゃん農業」「土日農業」になったものの、農家は「機械貧乏」に追われ「父ちゃん」は出稼ぎを強いられた。そして、手間を惜しむあまりに多用した農薬の威力を証左するかのように、田圃や畦(堀や水路)から小動物の生息する姿が見られなくなった。即ち、田圃の土や泥は無機質化し、単独の目的のために効率化、合理化、単一化されて米を生産するだけの工場になった。つまり、畦道の草は土の流失や浸食、風化の防止、熱の吸収、家畜の

餌(これは堆肥づくりの一環でもあり、田圃へと還元された)、子どもたちの道草(遊び場)などに役立つてきたのだが、既に悉く文字通りの雑草となり、畦道も農機具や軽トラックなどが通りやすいようにコンクリートやアスファルトによって固められたところが多い。だから「便利になった」と、心にもない苦笑いを浮かべながら土づくりに勤しむ農夫たちを知っている。

田圃は米をつくるだけの「工場」ではない。代かきや田植え、青田の頃の「水田」に限らず、秋に収穫を終えたあとの一部は再び水を巡らせて湿田と化し、小動物の生育に寄与した。時に渡り鳥や野鳥の餌場となったり、子どもたちの遊び場になったりする有機的にして複合的な「場」であった。つまり、人間と多種多様な小動物との「共生」「共存」「協調」、そして「共(教)育」が施されていたのである。田圃は一年中子どもたちの教室であり、国の検定教科書では学ぶことのできない四季折々の農作業や小動物、植物、気象などとの直接的な関わり、触れ合いが身体感覚や身体技法を育む立派な教材にもなっていた。

今や「進歩・発展・開発」を促す「ハイテク(バイオテクノロジー)産業」の結晶、科(化)学の粋を結集した「機械」や「器具」「資材」「添加物」「薬剤」などに伴う、「便利」で「楽だ」「簡単だ」という「効率化」「合理化」「簡素化」「単純化」などによって、農作業を手伝ったり田圃で遊んだりする子どもたちの姿が見られなくなり、かえって矛盾や弊害、歪み、捻れなどが蔓延、拡大、深刻化し、多方面での多種多様な「不調」が顕著になってきた。だから、これらをして私は「不調の社会(時代)」

と呼び、氾濫に伴う反乱や反動、そして逆襲を危惧せざるを得ないのである。

そこで米を含む野菜や肉などの食品に「残留農薬」が検出されないような「有機農業」「無農薬」「低農薬」が叫ばれ、生産者の顔が見える手づくりの「産地直送」「地産地消」が求められ、各地に「アンテナショップ」が登場した。そして生産地、生産日、生産者の氏名はもとより顔写真まで添えられるようになり、「食の安全」に目覚め重視するようになった。食品が身体の「環境」なのだから大いにこだわり、「食育」もまた重要にして不可欠なのである。

省みれば「添加物」や「農薬」に限らず、科（化）学的な薬品や素材の多用に伴い土壌や地下水などの汚染も生み出した。かつては自宅の庭さきや裏庭の一角に井戸を掘り、地下水を釣瓶などにて汲み上げて使用したり、裏山の湧水を引き込んで利用したりしていたのだが、今や「非近代的」にして不衛生だという理由で公共の「水道」に統一され、「水道代（料）」を支払うようになった。「水道水」をつくるために浄化施設を備え、各家庭に「水道」を敷設する。「水道水」には農薬や硝酸、アンモニアなどを除去するための浄化剤を投入する。だから、水質は「安全」になっても「味」や「臭気」に違和感を覚え、生ビールを好んで飲んでも「生水」をゴクンゴクンと飲む人はいない。そのために各種の炭酸飲料や各地の名水というミネラルウォーターを、缶詰やペットボトルで購入して飲むという「支払い」や「分別収集」を強いられている。さらには炭酸に含まれている糖分の過剰な摂

取により、若年層の糖尿病や成人病などの「習慣病」を生み、クロスポリジウム（水道水を汚染して下痢などを起こしやすい病原生物）<sup>2</sup>を除去、退治するために抗生物質を使いながら健康被害を生み出しやすく、治療や加療、予防などを強いられるうえに時間、苦痛、不安、そしてまた費用が伴うという「生活習慣」をつくりだした。

これは「水」に限らず「大気（空気）」の場合とて同じで、浄化のために「ハイテク」「バイオテクノロジー」を要し、莫大な費用を投じて排出削減を試みても「酸化炭素や二酸化硫黄、窒素酸化物などの濃度は一向に下がらない。大気には国境がないのだから、国際協調の名の下で「排出量の制限」を設けて分け合い、さらには売り買いし合うという「悪知恵」まで「排出」するようになった。だから多くの人々は、未だに喘息などの気管支炎や花粉症、シックハウス、アトピーなどのアレルギーに苦しみ、「自然の恩恵に与る」ことができなくなってきた。水や大気、そして加工食品までもが無機質な「もの」と同じように誰がつくったか分からない、「手づくり」「手触り」「手間暇かける」「手塩にかける」という身体感覚を離れて機械的に「工場」で生産され、科（化）学的で進歩的な製品が供給されるようになった。従って、「ホモ・サピエンス」と称賛され、有機質の固まりに等しい「人間」が、次第に「サル化」<sup>3</sup>し、無機質化するという提言は傾聴に値すると思うのだがどうだろう。

さらには「もの」に限らず、「食品」の進歩的な人工化に比例するかのように「サプリメント」<sup>4</sup>と称する「栄養補助食品」が、多種多様

にして多用されているのも無理からぬのである。「飽食の時代」と言われながらも「サプリメント」に依存する矛盾や皮肉を思う。だから「飽食」とは量ではなく質が大事だということである。人間や田圃の多機能、そして食品としても活用される動物や植物の多種多様な性質が、科(化)学の進歩に追従し、「楽だ」「便利だ」「珍しい」などと甘受しているうちに減少したり絶滅したりして画一化、類型化、統一化され、益々栄養の片寄りをもたらし食物連鎖しなくなるなどの弊害や反動、副作用の多発、挫折や危機、陥穽の拡大、是正や再生の困難を懸念、憂慮、危惧するのだが一人よがりの杞憂に過ぎないことなのであろうか。

動物や植物のなかには既に絶滅し、いくら「遺伝子組み換え」の「バイオテクノロジー」を駆使しても二度と同じものは生み出し得ない。自然という動物や植物を含めた生態系の破壊に加えて資源の枯渇、動物や植物の「種」である遺伝子の激減や絶滅を招くばかりの科(化)学の進歩や発展、不適切な応用などを是認、かつ黙認し、便利で豊かだという生活に溺れているのだから、「人間性の喪失」も共に「進歩し」、「スピード化」してきたのではないかと思うのだがどうだろう。日本霊長類学会会長(一九九七―二〇〇二)であった杉山幸丸氏も「人間性の獲得とは、第一に社会性の獲得だ。社会性とは周囲の個体に気を配ることであり、それによって円滑さを維持することである。第二には探険精神だった。そもそも人間性とは、人間になってから突然登場したわけではなく、『進化の中で徐々に育まれてきた一連の性質群』

と理解すべきものである。つまり、サルにさえある『人間性』が、現代社会の人間に欠如してしまっているのだ。これが由々しきことな<sup>5</sup>くてなんだろうか。」と述べている。だから「事実は小説よりも奇なり」という他言を要しない名言を裏づけるような殺人、詐欺、強盗、いじめ、ストーカーなどの「科(化)学的」で「便利」な「機器」を巧妙に用いた犯罪、事件、そして事故が頻発し、最新の人工衛星などを駆使して集めた詳細な「情報」に基づくと専門家たちの「地震予知」や「天気予報」が当たらないのも不思議なことではない。「近代化」と称して「進歩・発展・開発・スピード化・楽だ便利だ・効率的に・合理的(化)・客観的に・科(化)学的に」などとしたり顔で多用したり、二言目に「ヨーロッパでは」「アメリカでは」と比較や口実、理由づけ、あるいは説得の対象や根拠として代名詞のように用いたりしながら、実はいずれも見栄や虚飾であって、それらの真意について少しも理解していないのである。なぜならば、「近代化」も含めて欧米諸国に対する憧憬心、野次馬のような好奇心、欧米(諸国)に追いつきたいという強迫観念や劣等感などの、「島国根性」と名づけられた深層心理(卜ラウマ)に掻き立てられながら急いできただけに過ぎないからである。確かに「車は急に止まらない」という交通安全を促す標語もあるが、「急がば回れ」「負けるが勝ち」「損して得取る」「慌てる乞食は貰いが少ない」という教えもある。だから「人間性の喪失」を促すような無責任な政策による改革や改善(改革や改善という言葉の多用も、「よくなるだろう」「よくなるはずだ」と期待をもたせるのに都合がよい)

は、一向に実現しない。「近代化」の推進や具現に寄与してきた「進歩・発展・(再)開発・スピード化・楽だ便利だ簡単だ・効率的(化)・合理的(化)……」などを無分別に溺愛する無責任な生活から脱皮すべく「人間性の回復」を指しての「心理カウンセラー」が必要なのである。我々に必要な「心理カウンセラー」とは、温故知新とばかりに多種多様な古典(classic = 洗練されながら今に息づいているもの)に学ぶことである。さらには先師や先人、先覚者の名をあげ、その著作や言動、生涯を通じて教えを乞うことをいうのである。そこで私は今回、宮澤賢治の童話『なめとこ山の熊』の内容を追求しながら所見を述べてみたい。

## 二、「ためらい」という自制

人間はいつ頃から肉を食べるようになったのであろうか。狩猟採集生活によって縄文文化が形成された、ということはよく知られている。やがて焼畑や稲作などに伴う農耕生活においても狩猟採集は続けられた。それは食糧の補充に加え、農耕の過程や生産物を野生の鳥獣類による被害から保護するという目的もあって続けられてきたのであろうことは想像に難くない。だが、不確実な野生の狩猟から大量に飼育するようにになると、野生の鳥獣類と農耕との調和が崩れ、生態系そのものも異変を来し、「被害」が多発したり深刻になったりする。いずれも人間の作為が原因であろうことは間違いない。そこで日本生態学

会会長(二〇〇五年現在)の鷲谷いづみ氏(東京大学大学院農学生命科学研究科教授)の論考を参考にして私なりの見解を加えたい。鷲谷いづみ氏は次のように述べている。

現在のヒトの祖先あるいはそれに近縁な人類として、猿人、原人、旧人、新人などが知られている。道具の使用、直立歩行、言語などが、人類を他の類人猿と区別するメルクマールとされてきた。(中略)

直立歩行は、およそ四〇〇万年前のアフリカで生活したと考えられている猿人、アウストラロピテクスにすでに認められる。猿人の主な生活場所は森であり、ときにはサバンナにも出て食糧を探す生活していたものと考えられている。

ヒト属の最初の種は、ホモ・ハビリスという原人とされるが、猿人に比べると大きな脳をもち、体つきもややヒトに近づいた形態であった。また、意識的に道具をつくりはじめたことがうかがわれる。その道具とは石片であり、それは哺乳類の死体を解体し、肉をハイエナなどに狙われない安全な場所に運んで食べたのではないかと推測されている。また、石器を使うことで骨を割って骨髓を食べることができるようになったことは画期的で、ハイエナなどが利用した後の死体を食糧として利用できるようになった。<sup>6)</sup>

だから鷲谷氏は、「効率よく狩りをするようになる前の太古のヒトは、死肉を利用するとともに果肉や貝類などを集めて食べていたと考

えられている。貝や果実などが豊富に手に入る場所では、むしろそれらの採集利用が優勢であったはずである。」<sup>(7)</sup>という。やはり「動物の肉は初期の人類にとつても重要な餌であったが、すでに述べたようにそれは死肉の利用であった。道具を使って哺乳動物の死体から肉を切りだして食糧にするこの行為は、生態的にはハイエナやハゲタカなどにも共通するスカベンジャー（腐食動物）としての行為であり、狩猟行為の前段階である」と見ることが出来る。同じ肉を食べるにしても、死体を見つけてそれを貪るのと、生きた動物を殺して餌にするのとは、行動上、心理上の大きな差異があるはずだ。生きた動物を狩ることへのためらいや、危険回避に寄与する『恐れ』に打ち勝つには、『征服欲』とでもいった積極的な心の働きがなければならないだろう。<sup>(8)</sup>などという説明に「ヒトの歩み」を教えられた。

例えば、「危険回避に寄与する『恐れ』に打ち勝つには、『征服欲』とでもいった積極的な心の働きがなければならないだろう。」という「心の働き」は、やがて「近代化」を推進したり、勝敗を決するスポーツや競技に於いてよく耳にする、「攻撃は最大の防御である」「攻撃は防御に勝る」という鉄則を生み出したり、登山に駆り立てる「征服欲」も培ってきたであろう。さらには「死肉」の「探索型」から、焼畑や耕作による農産物の保護も兼ねて、野生の「生きた動物を殺して餌にする」という「狩猟行為」を伴う「採集型」への移行と変遷し、常に「進歩・発展・開発」を追求したがる人々の資質も育ててきたのである。いずれも「危険回避に寄与する『恐れ』に打ち勝つ」ために

「攻撃」を試み、「生きた動物を狩ることへのためらい」を打ち消そうとする免罪符代わりに挑み続けるようになったのであろう。

それでも猶、スポーツの試合や各種競技の勝敗は、「攻撃」だけで決着するわけではないように、世の中も「進歩・発展・開発」中心によって成り立っているわけではない。だから「恐れ」に打ち勝とうとする「心の働き」がある一方、「生きた動物を狩ることへのためらい」を失ったわけではない。私は、この「ためらい」という「心の働き」の大切さについて強調したのである。「征服欲」や「攻撃」に対する「ためらい」、「近代化」を標榜してきた「進歩・発展・開発・楽だ便利だ簡単だ・スピード化・効率的（化）・合理的（化）・科（化）学的……」などに対する「ためらい」を訴え、「ためらい」の意義や効用について一考を呈したい。

「善は急げ」「思い立ったが吉日」「手が早い」という諺や慣用語もあるが、「急せいては事を仕損ずる」「慌てる食は貰いが少ない」「急がば回れ」とも語り継がれているだけに、「ためらい」は決して無意味なことではないだろう。——「ためらい」は「躊躇ちゅうちゆう」とも書き、「気持ちをしずめる。心を落ち着かせる。病勢などを抑える。あれこれと思いをめぐらす。熟考する。あれこれと迷って決心がつかかぬ。躊躇ちゅうちゆする。」<sup>(9)</sup>という意味をもつ名詞（連用形として語構成する）である。つまり、「心を落ち着かせ、熟考する」一方で、「あれこれと迷って決心がつかかぬ」こともあつて然るべきなのだから、「征服」や「攻撃」、そして「進歩・発展・開発……」などの経済発展優先主義、市場原

理至上主義に「ためらい」という自制・自重・自省・抑止力が必要なのではないかと言いたいのである。

確かに、人も社会も諸行無常、有為転変にして老化、劣化、退化する。すべてが無常迅速にして可変的なので、「改革」「改善」を「善は急げ」「思い立ったが吉日」とばかりに「狩獵行為」にも等しい作為を施し、無我夢中に「もの」づくりに勤しみ、「もの」の獲得のために人情の機微を摩滅させてきた。それでも「もの」の豊かさに溺れながら、多くの矛盾や弊害、歪み、ジレンマ（板挟み）、皮肉、不具合、コンフリクト（葛藤）、パラドックス（逆説）、不調、反動、副作用、クライシス（危機）などに伴う「合併症」や「複合汚染」に喘ぐような状況が広がり、「改革・改善」から遠去かりつつ改善と思われるような事故や事件、犯罪が多発するようになったのはどうしたことであろう。これは一人ひとりの地力じりきの貧弱化を来たし、社会の俗悪化に波及する。即ち、国勢の低下や劣化という他はない。

歴史は「善は急げ」と教えてきたのだが、「善の裏は悪」であり、「善に強い者は悪にも強い」とも語り継がれてきた諺を思い起こすべきであろう。そして、諺や慣用句、格言、金言などの言語文化に秘められている意味深長な所以を繙き、「急がば回れ」「損して得取る」「便利は不便」の教訓に気づく「ためらい」の間を置いて間合おうのではなからうか。温故知新、過ぎし日々を省みることがどうして未来に生きる妨げにならう。私は何事に当たっても「ためらい」という「真意」や「善悪」を考えるための間合いをとり、間を配ることが大切であつ

て、決して間延びしたり間を欠いたりするような間抜けな人、即ち、事の「真意」や「善悪」を考えない人になつてはならないということ  
を言いたいのである。

それでは宮澤賢治の童話『なめとこ山の熊』の主人公・淵沢小十郎は、獵師（狩人、またぎ、山人）とはいうものの生きている熊を捕る（殺す）ことに「ためらい」がなかったのであろうか。「なめとこ山の熊」も小十郎も山を愛する知り合いであり、お互いに尊重し合っている。童話『なめとこ山の熊』は、

なめとこ山の熊のことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ。淵沢川はなめとこ山から出て来る。なめとこ山は一年のうち大抵の日は、つめたい霧か雲かを吸ったり吐いたりしている。まわりもみんな青黒いなまこや海坊主のような山だ。山のなかごろに大きな洞穴ほらあなががらんとあいている。<sup>⑩</sup>

という書き出しで始まり、さらに「そして昔はそのへんには熊がちやごちや居たそうだ。ほんとうはなめとこ山も熊も私は自分で見たのではない。人から聞いたり考えたりしたことばかりで、間ちがつているかも知れないけれども私はそう思うのだ。とにかくなめとこ山の熊の胆いは名高いものになっている。」と続いている。ここでは物語の舞台を紹介し、伝説や伝承に「考え」も加えた創作だという執筆の動機や意図、方法に触れている。そして、賢治は「熊捕りの名人の淵沢

小十郎がそれを片っぱしから捕ったのだ。」と書いている。だから「熊捕り」は猟師（狩人、またぎ、山人）の伝統や習慣に基づき、暮らしたずき（方便、ここでは生業のこと）として繰り返され、その胆や毛皮を売りながら営まれている様子が描かれている。私は「それを片っぱしから捕ったのだ」という語気や語勢に押されて、『「ためらい」もなく繰り返されている」と無雑作に述べようと思ったのだが、さらに読み進めてみると、作者の賢治は次のように説明し、小十郎は次のように語っていた。

小十郎は膝から上にまるで屏風のような白い波をたてながら、コソパスのように足を抜き差しして口を少し曲げながらやって来る。そこであんまり一べんに言ってしまうて悪いけれども、なめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのである。

その証拠には熊どもは、小十郎がぼちゃぼちゃ谷をこいだり、谷の岸の細い平らなつばいにあざみなどの生えているところを通るときは、だまって高いところから見送っている。木の上から両手で枝にとりついたり、崖の上で膝をかかえて坐ったりして、おもしろそうに小十郎を見送っているのだ。まったく熊どもは小十郎の犬さえずきなようだった。

これらの説明は作者・賢治の「ためらい」でなくて何であろうか。物語は人間と熊との生存競争にして、食うか食われるかの現実的な闘

争を描いているにも関わらず、「なめとこ山の熊は小十郎をすきなのだ」とし、「まったく熊どもは小十郎の犬さえずきなようだった」と、熊の立場や人間が理解しようとしめない熊の心情、熊の友情、熊の求愛を代弁し、人間と動物、即ち小十郎と熊、さらには熊と犬の一体感を表し、闘争を避けて共存の可能性や実現を訴えているのだと思われる。熊は小十郎を見つけて襲うことも出来るのだが、「だまって高いところから」「おもしろそうに小十郎を見送っているのだ」から、殺し合いのような闘争を望んでいないことである。だから生存のために競争や闘争をしなくても良いように、自然の生態系に従い、「分」を守ることが共生共存の秘鍵なのではなからうか。熊が闘争を望まないように、人間も「生きた動物を殺して餌にする」という「狩猟行為」を避け、動物同士の食物連鎖、生存競争によって生じた「死肉を利用」する知恵を開発し、進歩させたらどうであろうか。命は「もの」と違うのだから「殺す」のではなく、「死」を受容して活用することが再生させることであり、本当の「共生」なのではなからうか。今日の「脳死」を「人の死とする」という結論や判定を巡る生命倫理の論争もまた、「死」を受容することによって新たな活用が選択され、かつ施行されて、そして再生されるのである。「動物を殺す」という「狩猟行為」が「恐れ」を生み出し、その「恐れ」に「打ち勝つ」ための「征服欲」を裏づけ、比例するかのように、小十郎が愛用しているような「ポルトガル伝来」というような大きな重い鉄砲が「開発」され、さらに殺傷力や破壊力に富む武器へと「進歩」してきたのである。そして、「征服欲」

の肥大化につれて、動物よりも人間を対象とした「狩猟行為」に等しい戦争が絶えないのも無理からぬのである。だから「征服欲」の衝突、攻撃の競争や競演、そして殺し合いは、熊を含めた動物と人間が共存し合うべきだという熊の心情や求愛する教えにも逆行し、動物や植物、そして人類の多様性や遺伝子資源を失い、人類の滅亡を加速させる行為に過ぎないのである。即ち、同士討ちであり共食いである。それは共倒れの階梯であり、共死への旅立ちである、と言つては言い過ぎであらうか。

（ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授）

〈注〉

- (1) 大気（空気）の性質については、『平凡社大百科事典』一九八五年三月二五日初版発行。一一九四—一九六頁。及び新村出編『広辞苑 第四版』岩波書店、七—六頁。「空気」の項より引用した。
- (2) 鷲谷いづみ『自然再生——持続可能な生態系のために』中公新書、二〇〇四年六月二五日発行。八一頁。「第四章 健全な農業 健全な食卓をめざして」のなかの「征服型近代農業の環境負荷」の項より引用した。
- (3) 「サル化」とは、正高信男『ゲータイを持ったサル——「人間らしさ」の崩壊』（中公新書、二〇〇三年九月二五日発行）を参考にしたものである。
- (4) 佐藤洋一郎『里と森の危機（クライシス）——暮らし多様化への提言』朝日選書、二〇〇五年一月二五日第一刷発行。五五頁。「現代は飽食の時代か」の項を参照した。
- (5) 杉山幸丸『進化しすぎた日本人』中公新書ラクレ、二〇〇五年九月一〇日発行。大いに共感した。一読をお勧めしたい。
- (6) 注2と同じ。四六—四七頁。「第二章 生物多様性を育んだ共生と人類」のなかの「共生の輪のなかのヒト」の節より引用した。
- (7) 注6と同じ。四八頁より引用した。
- (8) 注2と同じ。五〇頁。同じ章の「死肉の利用から狩猟へ——探索型から採集型へ」の節より引用した。

(9) 新村出編『広辞苑 第四版』岩波書店、一六一七頁より引用した。

(10) 宮澤賢治『風の又三郎』新潮文庫、昭和三六年七月二五日発行。同四九年一月二〇日二刷発行のなかの一四六—一六〇頁。「なめとこ山の熊」より引用した。以下、注記しないものも含め、すべて同書より引用した。

附記 本誌『長谷川秀男教授退職記念号』に拙稿をも加えて戴き、誠に有り難い

こと関係各位に御礼を申し上げます。

この拙稿は、昨今の社会状況を目の当たりにしながら、宮澤賢治の作品にこと寄せて所見を述べ、持論を展開したものであります。執筆に当たりましては、愚生を採用して下さり、教授会や各種委員会等に同席するようになりまして以来、十七年以上もの永きにわたり、長谷川秀男先生より賜りました数々の御厚情や御助言、御指導、御鞭撻、お力添いに加え、御厚誼に与つて参りました日々を忘れないようにと心に誓い、感謝と切ない思いを胸に秘めながら数ヶ月を要して綴つて参りました。論考とは名ばかりの拙稿にて心苦しく赤面を隠し得ませんが、愚生の力量をしてこれに代わる何ものもありませんので正直にお伝え申し上げます。

長谷川先生には、辞令を拝受して間もない桜の花見で賑わうなか、観音山の麓の「風車」という西洋料理店にて初めて御尊顔を拝して以来お近づきを賜り、何かにつけて御相談申し上げたり、御教示をお願いしたりしながら御警咳に接して参りました。地域政策学部への異動に際しましても愚生の不安を払拭するような御鞭撻を、各種委員としての責務を担うに当たりましても懇切な御指導や御助言を、それぞれ賜りましたことなど決して忘れるものではありません。愚生が今日あるのをして「長谷川先生 ありがとうございます。本当に御蔭様です」と、感謝を込めて幾重にも申し上げます。長谷川先生の益々の御健勝と御活躍を祈念し、御礼の御挨拶を申し上げます。

平成十七年十一月二十七日

謹 識